當麻

ワキ詞

是ハ鎌倉殿の御内に富樫の
権頭家次にて候扨も此たひ
宇治橋乃合戦ニ味方うち勝
が獨高以数を取ひ候衆り手ふも
囚人あまた召捕中ニも平家殿と
申おもきひとを当獨申ては
此由を申上てくれえだきぎ候よ

謀し申せし所出させ給ひける
此由新葉歌ニ申させ給ひしや此歌人
教ぬきし君を思ひて嘆きをや
風の誘ふ花ハ武蔵国乃
住人みまし木の太郎種直より
代桜か安治橋乃合戦よきれて
弓矢取のことを剥てるゝ其哉

ぬの哉とか侍り了し文は
弓に常られは春葉二のへし
閣くとは揃きそよ其星のは
生揃以降もちの身ほとよ謀
さうけし由中は明家も同人の
教よへらやと思ひし時に新葉に
あすの庵と息はゆるん新神し

都乃空の雲井までつゞくあづまぢ
うき旅衣日もかさなりて行
程もなくみやし伊豆の府
三嶋乃里に着きにけり
（詞）〽急候程に伊豆の三嶋に着て候
此所にて囚人をば高橋に
やがて申入て案内仕度由候

（トモ）〽畏て候　案内申は
囚人を行高橋殿に申入くる
御座候　（ツカヒ）〽何の御用にて候ぞ
新三小家人乃事申さば　〽是ハ
春栄殿の御ゆかりの者にて候
高橋殿へ申度事の候
予申候て見まゐらせて候

同人乃遊びなりけり紫面は禁裏

まかり候我ら春栄殿乃法手には不

しる痛ましや中にも召ざると紫面中

さうけるまても召ぐる都のうへ大法

乃事なれば召大刀ことなきを取

り候 ヲカシ 案てふりくはゞ申には吹と

通路をかゝりけるが さく 禁裏

まかり候我ら春栄殿のゆかりの者此

御事ゆゑには遥ばると是自に

勉しふけるで申す旅人ぞ候ふた

太刀ことなきをたまはりて候

羊 春栄殿の遊びのやと何と参候

羊 母わかりて候 ミテ さらは見申す

いかに春栄殿の為に参る

わつわつ 兄君秋葉の兄よ
ぎましおの大ごいな我に申老
まそれりて宇治橋乃合戦に
をいって春葉少し一仁入りひ
詩歌りぐ弓手の肩を射させれ
矢をぬの生とか傍に引返さは
君よ才まそく秋葉姫一のいまし

生捕まそは君があまわれり見捨
つきくみひて足まえ参わてふ
秋葉よ引告さり我て筋生へ
奥田部人ご我と乃御出陣に
神姫にいばめく両書由を秋葉殿へ
申はたしぎりくなくはまそらく
いへは申す いつる秋葉殿へ申す

御身は舎兄よりもまさる乃太郎
いとけなき時は出家させまゐらせて
候ほどは急ぎて法師と成りて
上ゲ
是は誠ーうしは兄よりは
もはや其門治稽乃合戦をなして
わびさ存家不定と申す属存ひ
清盛
ロギ
あらゆーきあやすきしく

御舎兄と伝へもはや其方さま
先祖のひまーわらうと法説へ
上ゲ
不思議なる事よまゐらす譜代めし
法りし家人よみて召急ぎて
遊ゝしを幼重へ
ロギ
梅は誠よ
家人よみて張りざくあらはやの事
遊ゝしは慮しげりの小中ゝ伝乃

歌人の中くらゐなれは猿まる
よもあし　時をえて学ふも
うた信夜こそ花末代を教と
児の後の秀がけやとまきの人神他
志り美くわ　やさし郷の世情
楷ても枚いかりしぬなりし人乃
し　一千年乃後とても

当人は志りしめく候しまわ
見我も能また人ふまたの世系
やまのはは歌になぞら　むま流
この後乃を師匠をうたの乃
まし本の数業を　現在の兄我
歌人他も入ふ　乃部を運歌もへ
つき乃　漢無ふの無筆なかわ

いや我母御よ家をはなれまて
雄直こ被まて腹きらせばやがて
ありしせばは若志よ力を外里
なく
なふく艶くこそはなる
家を助かせ中させさうう家人
とはや清き世の不思なりなわ
なきなり敵さきを外へ兄は当く

雄直も義業もろく同人当護の
法えも我もずみんを思ひ慮るよ
ばるも法へきは兄才まわらて
ともふ被をぬらしなわく
云語を勤御兄弟の清心中哉
盛遣し中ばお前も落涙仕まつる
いらは雄直与中天ば業義業慶を

痛り候と申事候の儀にあらば候
親子を一人にて候を宇治橋にて
合戦に討せられ候はゞ武春栄厳の
おもむきしかもうけしに筈
あはれ候様候家もさぞ候るとかひ
候へしが申請一礼を候はせ
申度との志願にて候はゞやなどと
申すが是は陳がありて何せなき人
ば候に申候事もいさゝ候てまうと
ますはゞいりにいなな残よ申候
ばあさ鎌倉にわけやうなさ候て
ば家はなこきぬさ候因人を
皆様ー申せ申候出させ候ては
ば家殿乃候田宅を甘させ申させ候

十五その流溺せしも無死し
死しても生し流轉にめぐる
子生み乃親子ゝも隔て離りみ
自他なくすぎ來しは羊鹿牛車に
乃りし火宅のきうひを出ゆし家
煩悩業苦みな三乃綱にばなち神
きぬ愛見の縛せらるゝ　それ生死

流轉して人界に生まれては
バの苦しみ離れ去国界を
おも生みよ殺の報殺乃孫聲は
無倫乃ことし悪人をなくした
ぐれまことを想を苦ゝせゝ生界
くるしみ海よう多志深くて
遊流乃顔りし生死もきぬる

此しまざとさらは國ハ神國と
いひながらみぞ佛法流布乃時
義の法もさの發もざとて伝え
何のさまのこゞ佛法東漸の栄
ぞ時の伴よ濃やかなる人家
萬以ぞ末迹の垂忘佛経流廣て
弥陀の國乃涼し気風ちなくは
唯心乃浄土なるへし　所を
思ふもし落もしやかい京路ら
旅になきさて伊豆の府なれや
三嶋乃明神本地大通智勝仏
こと志慈悲ちらとて万衆
中々乃様に突長閑乃巻も
動れをかし紗へとぶふめくり

新艘中乃は當乃小雨天狗枯て
うま二たひまゝかやさ免ぬりせ
いりふ宮様殿ばりまくりまし濃
りやうちなわ夢は従らんとよ
ほ免またゝやうちきゝ於るゑ
ぼーき於との使り　いや
見宮の御當乃御中によわ円人

七人の免状なわ　梅王丸殿へ
七人乃うち　あゝ嬉しく
先より万世だまく　若宮御當の
中ふよわ円人七人の免状出す
才一番には御當乃使ひ君前乃
御目才二番には豊後の次郎
才三番にはましー木乃春栄丸

一 して日ハ殊更上吉は ゆくはる
家に傳はる重代の太刀が業
殿にまゐらせて守護家乃
猶悦ひの道乃ゞきもめくるや
祝ハのけ伊豆比三島乃神風も
小筏おさまへ筏よりたしや
しなひさしきともかきりしや

春夜の月とハこの時なりけむ
めでたき筏猶ゝめくる盃ざひ
重なる春栄もほど新よきち宝
親と子孫ぞめをいりしみ祝言の
ぐ千秋萬歳の舞乃袖ひるかへし
まふ光うや 千世よやちよ哉
さゝ神石孫 祝ふ心ハ余栄楽

いつも小猿道がしるめでたき拆
なまなか一まし御すへ人
いりふゝ猿気楽楽　東路の
ちゝ梅乃やさしまはの無猿
手世のゆけるふ姿みとるすゝの眼
ばみとわりなかの見とわの那
老木も花猿　大はやりの竹乃

親子乃睦ミ　み兄弟の神と
いひ兄といひばもく甘はく
ましくおやこ兄弟のきのふは
子もぢ兄弟りなる雪好ふご三島乃
宮比ば刹生悦みおのゝ人親子
兄弟さるも色はましくる打清まて
鎌倉へさうる祭わ業拆